

## ■ 教育・管理系理学療法 10

### 975 短時間の人体解剖実習における工夫とその教育効果

菅原 仁<sup>1)</sup>, 河上敬介<sup>2)</sup>, 遠藤浩之(OT)<sup>3)</sup>, 小林 聖<sup>1)</sup>, 津野弘美<sup>1)</sup>, 小笠原紀子(OT)<sup>3)</sup>, 山崎大輔(OT)<sup>3)</sup>, 中川 仁<sup>1)</sup>, 大場美恵<sup>1)</sup>  
太筈俊宏<sup>1)</sup>

1) 常葉学園医療専門学校理学療法学科, 2) 名古屋大学医学部保健学科理学療法専攻, 3) 常葉学園医療専門学校作業療法学科

**key words** 人体解剖実習・標本観察実習・卒前教育

【目的】近年、全国の養成校中の85%程度が、見学または剖出を伴う形で人体解剖実習を行っている。しかし、その実習時間数は、約50%近くが20時間未満と短い。我々の専門学校も、平成14年度より、人体解剖実習を年間10時間実施しているが、開始当初は多くの問題点があった。そこで、それらの問題点に対して対策を講じることににより一定の改善効果を得たので報告する。

【対策前人体解剖実習の概要】人体解剖実習は、1年次の9月に液浸標本観察実習(運動器系を中心とする液浸標本の観察と触察、5時間)、2月に人体解剖観察実習(剖出後の遺体観察と一部剖出、5時間)を行っている。事前指導として、実習への取り組み方や観察記録方法の説明を各実習時に2時間行っていた。全体で人体解剖実習に関わる時間は14時間であった。課題は、観察記録と感想文、及びご遺族への礼状作成であった。

【問題点とその対策】開始当初の問題点とそれから3年間で取り組んだ対策について以下に述べる。(1)実習に対して学生が不安感を抱いていたため、写真・動画を使用した実習状況を詳細に説明した。(2)標本とご遺体の剖出状況を専任教員が未確認であり、事前指導でその説明ができなかったため、事前に教員が標本とご遺体の剖出状況を観察した。(3)人体解剖実習時間が短く全ての観察ができなかったため、各観察グループ内で観察部位を分担した。(4)講義進捗度と人体解剖実習内容の不一致により骨格筋、神経、血管等の同定ができなかったため、主に観察する器官の講義を実習前に終了するとともに、学生自身による事前学習を促した。(5)専任教員の指導力不足があっ

たため、人体解剖トレーニングセミナーや卒後研修会を受講した。(6)実習後の報告が稚拙であったため、事前指導時の観察記録方法の説明に前年度の観察記録を使用し説明した。また、事後指導にて報告会を開催し観察記録方法の指導を再度行なった。なお、各実習の事前指導を12時間、事後指導を8時間行ない、全体で人体解剖実習に関わる教育時間を50時間にした。

【結果とまとめ】(1)と(2)の対策により学生の不安感が減少し、剖出状況の把握が可能となり、事前指導が充実した。(3)と(4)の対策により、事前学習が充実し、他のグループ員へ説明するための責任感が生まれた。また、骨格筋、神経、血管等の同定が可能となった。(5)と(6)の対策により、教員が観察方法を説明できるようになり、事後報告書の内容を充実させることができた。以上のことから、事前と事後の指導を充実し、教員・学生双方の取り組み姿勢を変えることで教育効果を高めることができたと考える。われわれが実施した、感想文や礼状から医学の基礎知識の向上だけではなく、人間への畏敬の念を培う精神面と専門職としての自覚につながる事が読み取れた。よって、短時間の人体解剖実習でも、学生が得るものは大きく、今後も検討を加え、より良い実習にしていきたいと考える。

## ■ 教育・管理系理学療法 10

### 976 卒後教育としての人体解剖実習実施の現状と課題

木村智子<sup>1)</sup>, 分木ひとみ<sup>1)</sup>, 白星伸一<sup>1)</sup>, 河上敬介<sup>2)</sup>

1) 藍野大学医療保健学部 理学療法学科, 2) 名古屋大学医学部保健学科 理学療法専攻

**key words** 人体解剖実習・卒後教育・アンケート調査

【はじめに】

我々は平成12年度より卒後教育の一環として、名古屋大学医学部において理学療法士(PT)・作業療法士(OT)・言語聴覚士(ST)などを対象に、人体解剖実習勉強会を開催してきた。勉強会は年間4回のペースで、各回約6時間かけて人体解剖実習を中心とした内容で実施している。参加者の勤務地は、多くが近畿圏内となっているが、遠く関東圏や九州圏などにも及んでいる。今回は、このような卒後人体解剖実習実施の現状を紹介するとともに、勉強会参加者へのアンケート調査から、その必要性や課題についても検討したので報告する。

【アンケート方法】

勉強会へ参加したことがある191名を対象に、無記名質問紙法によるアンケート調査を実施した。調査内容は、職種や所属施設、勉強会への参加回数、参加目的、参加目的の達成感、臨床への貢献感、参加後の変化などとした。

【結果】

有効回答数は159名(有効回答率83.2%)であった。参加者の職種は、PT 83.6%、OT 15.1%、ST 1.3%であった。所属施設形態は、医療施設83.0%、老人保健施設4.4%と、臨床に携わっている者の割合が多かった。平均参加回数は2.3±1.6回で、再参加希望者は67.3%であった。参加目的は、実際の観察を通し人体の構造を三次元的に捉え、日々の臨床で生じた問題を解決したいとする内容が多かった。また、89.9%の者が参加目的を達成しており、96.9%の者が日々の臨床活動へ活かすことができたと回答した。参加後には、96.8%とほとんどの参加者に意識

の変化が認められた。変化内容は、触診を大切にできるようになったとする意見が82.4%と最も多く、その他に命の大切さをよく考えるようになったとする意見も31.4%を占めており、臨床活動へ直結する内容のみならず、倫理面への変化も認められた。しかし、10.1%の者が、実習時間や知識の不足により各器官の同定が困難であったなどの理由から、参加目的の達成感が得られなかったと回答した。また、少ない機会を後輩に譲らなければならないことや、会場までの距離が遠く、経費がかかり過ぎるなどの理由から32.7%が再参加は難しいと回答していた。

【考察】

近年解剖学教室のご協力により、卒前においても今回紹介した人体解剖実習勉強会のような1日見学実習の機会が多くなってきた。それに関わらず、今回の結果から、卒後人体解剖実習を行うことで、臨床的疑問の解決、意識の変化、触診再学習の必要性認識などに効果が見られ、卒後教育として人体解剖実習を実施する意義が確認された。今後の課題としては、より効果的な卒後人体解剖実習を行うために、十分な事前学習を積んだ上で実習に臨むことが挙げられる。また、臨床家が勤務する近隣の地域で、継続的に人体解剖実習ができる環境がつけられることも期待する。